

「いわての師匠」派遣事業 実施事例集

【事例①】岩手県産業教育振興会への講師派遣

日時：平成26年6月12日（木）14時30分～15時45分
場所：サンセール盛岡
対象：平成26年度岩手県産業教育振興会総会並びに理事会参加者約80名
講師：岩手大学 工学部 機械システム工学科 岩渕 明 教授
演題：『地域の現場を担う高卒人材の育成について』

<講演要旨>

- ・岩手県の高校の現状
- ・岩手大学の復興推進活動
- ・いわて未来づくり機構-復興教育作業部会-
- ・専門高校への期待
- ・地域活性化にむけて

<感想・講演による効果>

今回の岩渕教授の講義はまさに時季に叶った内容であり、産業教育を支える者、推進する者にとって新たな決意を促すものとなった。

一方で、専門高校での成績優秀者が県外へ流出する原因については、様々な意見が寄せられた。

日く

- ① 成績優秀者も潜在的には地元志向がかなり強いこと。地元には優秀な企業の立地が少ないことから、やむなく県外へ流出すること。
- ② 地元には優良企業が立地している場合には、成績優秀者から間違いなく応募していること。
- ③ 四国4県ほどの県土を有する岩手の高校生の就職問題を一元的に取り扱うことの困難性（企業立地、通勤距離等を含んだ地域間格差の存在）
- ④ 普通高校卒就職者と専門高校卒就職者との比較が大事（学力・実践力・離職問題等）
- ⑤ 学力面で一方的に普通科より専門科が低位にあるとの認識に疑問（一部の超進学校を除いて）
- ⑥ 震災復興に岩手大学がどのように立ち向かい、貢献しているのかが良く理解できた。

ともあれ、演題「地域の現場を担う高卒人材について」関係者で共通認識することの重要性を学ぶことができ、このような機会を提供して下さった「いわて未来づくり機構復興作業部会事務局（岩手大学地域連携推進課）」の関係の皆様へ深く感謝を申し上げたい。

今後とも当会に対しまして、関係各位の益々のご支援とご協力を切にお願いしたい。

<写真>



【事例②】奥州市立水沢南中学校への講師派遣

日時：平成26年7月3日（木）12時40分～13時50分

場所：国立岩手山青少年交流の家

対象：水沢南中学校 第2学年 228名

講師：岩手県復興局復興推進課 菊池 辰也 主任主査

演題：『東日本大震災津波からの復興に向けて』

<講演要旨>

- ・岩手県庁の仕事について
- ・東日本大震災の被害の概要
- ・東日本大震災の被害に対応した「復興計画」について
- ・「復興計画」の内容
- ・「復興計画」が目指す姿
- ・「復興計画」の進め方
- ・誰が進めるのか
県、県民、NPO、研究機関、ボランティア、地域団体などが連携して進める、
そして計画を進める主役は、この講演を聞いている皆さん
- ・みなさんに今やっていてもらいたいこと

<生徒からの感想（抜粋）・講演による効果>

- ・私はまだ中学生でボランティアや復興の支援などあまりやるのが少ないのですが、中学生としてできる限りのことをやっていきたいし、生活できることをありがたく思いたいと思いました。
- ・震災から3年がたち、内陸に住んでいる私たちは「復興」という言葉があまりピンときません。しかし、今回の講演でどんな形で復興が進められているか最終的にどうなっていきたいのかななどを詳しく学ぶことができました。「ふるさとがふるさとであり続ける」ために、私も今できることを精一杯成し遂げようと思います。
- ・三陸が完全に復活するには、まだまだ時間がかかると思います。でも自分ができることをしっかりやっていけばいつか絶対復活すると思うので、それまで頑張っていきたいです。

<写真>



【事例③】「日本の次世代リーダー養成塾 岩手県事前研修会」への講師派遣

日時：平成26年7月11日（木）14時30分～15時30分

場所：岩手県公会堂

対象：岩手県推薦枠受講者（高校1～2年生）8名

（盛岡市立高校・平舘高校・金ヶ崎高校・大船渡高校・岩泉高校・
西和賀高校・一関第一高校）

県職員17名

講師：岩手大学 工学部 機械システム工学科 岩淵 明 教授

演題：『復興における岩手の今後の方向性及び岩手の若者に望むこと』

<講演要旨>

- ・震災の被害と復興状況
- ・岩手県の高校の現状
- ・高校生への期待
- ・地域活性化へむけて 等

<参加高校生からの感想（抜粋）>

- ・住んでいる地域について知らないことがたくさんあり、もっと自分たちは知るべきことがあると気付いた。
- ・講演では、講師から質問されたり、講師に質問したりする場面があり、質問を考えながら話を聞くということを意識することができた。
- ・講師の方に突然指名されて答える場面があるなど、リーダー塾での講義をイメージすることができた。
- ・震災、そして岩手の課題について知ることができた。
- ・講演で岩手の現状などをしっかり知ることができ、リーダー塾に行って他県の参加者から震災の被害の程度を聞かれた時、しっかり説明することができた。
- ・岩手県について深く知ることができ、他県の高校生から震災について聞かれた時、体験談を交え客観的な視点で話すことができた。
- ・講演では、高度な考えや発想を聞くことができた。自分の教養範囲を大きく広げることができたと思う。

<講演による効果>

- ・岩淵教授から東日本大震災の被害及び復興の状況・課題を説明いただき、参加高校生にとっては、復興に向かっている岩手県の現状について改めて深く学ぶ機会となった。（東日本大震災の発災から3年以上が経過し、今の高校生にとって震災の風化を防ぐきっかけとなった。）
- ・講師である岩淵教授から高度なお話を聞いた後、講師と参加高校生との間で質問・意見交換をすることを通じ、リーダー塾の良い予行演習となった。

<写真>



【事例④】「奥州市立水沢中学校」への講師派遣

日時：平成26年9月8日（月）13時40分～14時50分
場所：水沢中学校 第1体育館
対象：水沢中学校 第3学年 227名
講師：岩手県復興局復興推進課 菊池 学 推進協働担当課長

<講演要旨>

- 1 岩手県庁・公務員の仕事について
- 2 東日本大震災津波による被害状況
- 3 復興への取組
 - ① 復興に向けてまちづくり
 - ② 復興計画
 - ③ 3つの原則に基づく取組
 - ④ 復興の課題
 - ⑤ 新たな飛躍に向けて

<生徒からの感想（抜粋）>

・「復興」とは元通りにするのではなく、元よりもより良いものにするということだと教えられました。今、沿岸の人たちは、正に復興に向けて、日々、努力しているのだということが、菊池さんのお話を聞いて良くわかりました。（3A女子）

・復興について自分が知らなかったことばかりで、いつの間にか震災や復興のことに感心を持たなくなっていたのかもしれませんが、自分が知らなかっただけで、たくさんの復興活動が行われていたこと、そして、そのために他県などからのたくさんの協力者が来ているのだと知りました。改めて、助け合うことがものすごく大切なことで、助け合うことでたくさんの困難を乗り越えていくことができるのだと学ぶことができました。（3A男子）

<講演による効果>

・「私たちはあの日、あの時を忘れない」と題して、震災の状況を改めて知り、復興の現状を知った上で、自分たちの生き方や将来のことを考えていこうと震災復興学習に取り組んでいます。今回、国や市町村との調整を取り、全体的な復興を推し進める立場の県庁から講師の方を招いて講演していただき、改めて、復興への取り組みは沿岸地域だけの問題ではなく県全体、みんなの復興なんだということを考えさせることができたと感じました。「あの日を忘れない」だけではなく、「自分にできることはなんだろう」と意識する生徒も増えました。この講演の後、沿岸の釜石、大船渡を訪問し更に学習してきましたが、感謝の気持ちを含めた合唱をそれぞれの場所で歌えたのも生徒の変化の一つだと感じました。大きな変化は求められませんが、教育現場での復興教育を繰り返し、機会をとらえて実施していかなければならないと考えております。

<写真>



【事例⑤】「岩手県立杜陵高等学校」への講師派遣

日時：平成26年10月3日（金）①12時00分～13時00分
②17時45分～18時35分

場所：杜陵高等学校 ①多目的ホール ②視聴覚室

対象：杜陵高等学校 ①第1～4学年 146名 ②第1～4学年 14名、教職員40名

講師：岩手大学 工学部 機械システム工学科 岩渕 明 教授

演題：『夢を持ちましょうー震災復興を通して皆さんに望むことー』

<講演要旨>

1. 地域の課題（人口の減少、若者の流出、震災からの復興）について
2. 震災被害と復興状況
3. 復興を通して地域を考える
4. 地域活性化に向けて

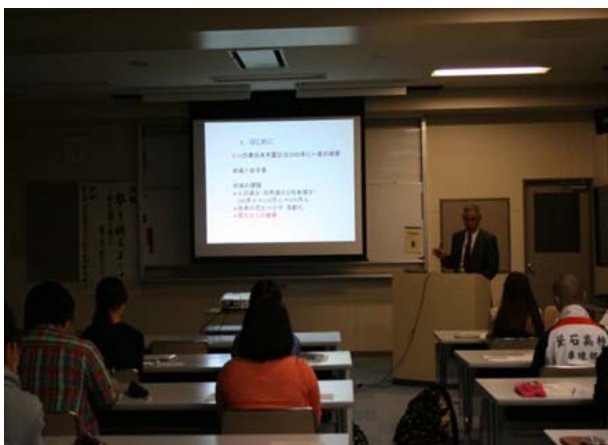
<生徒からの感想（抜粋）>

- ・震災のことを風化させずに、次世代に伝えていかなければいけないと思った。復興について自分たちに何ができるのか、何をしていかなければいけないのかを考えていきたいと思った。自分たちの住む地域の魅力を作っていく、魅力的な岩手を作っていくと思った。（2年男子）
- ・地元が好きな自分にとって、岩渕先生のお話を聞いて、岩手のために何ができるかを考えたら、一回県外に出てみて外から見た地元を見てみたいと思った。とても面白いお話で楽しい講演会でした。（3部4年男子）
- ・私が考えていた復興と違う視点の考えを聞けて、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。県内に残る大切さやこれからの岩手についてさらに考えていきたいと思いました。復興にも関係する仕事に就く予定なので、重要性を考え、全力で取り組んでいきたい。（3部3年男子）
- ・将来について目標を定める良い機会となった。これからは、大人だけでなく自分たちが未来を担うんだという意識を持ち、自分の将来を考えていきたい。（1年男子）
- ・私は震災が起きたことを不幸なことだとばかり考えていましたが、チャンスだという考え方があることに気がつかされました。そして、改めて岩手のためにこれからできることを深く考えさせられました。また、ボランティアに行くことを考えていたところだったので、もう一度よく考えてから被災地に行きたいと思います。（3部2年女子）

<講演による効果>

今後の復興を担う高校生に対して期待をしていること、夢を持ち能力を磨き、それを生かして皆で地域活性化に向けて取り組み、魅力的な地域を作っていくことの岩渕先生のメッセージは、生徒達の心に伝わったと感じた。

<写真>



【事例⑥】「岩手県立久慈高等学校」への講師派遣

日時：平成26年12月17日（水）14時10分～15時50分
場所：久慈高等学校 視聴覚室
対象：久慈高等学校 第1学年 186名
講師：岩手大学 工学部 社会環境工学科 小笠原 敏記 准教授
演題：『東日本大震災を踏まえた津波防災に対する心構え』

<講演要旨>

- ・震災の被害、復旧復興の状況と、震災からの今後について
- ・津波などの災害発生のメカニズム、防災意識の啓発

<感想・講演による効果>

本校1年生は震災当時、小学校6年生で、当時のことをよく覚えている。事前アンケートでも震災に関して深く考えていることが分かる。中学校でも防災についての教育は受けているが、実際の行動に直結する内容が多く、津波の仕組みや避難の仕方の意味合いなど、なぜそうであるのかを本講演会で学ぶことができたようである。

生徒の感想としては、川を遡上する様子や実際に家屋が流される光景などを目にして生徒もおり、真剣に考えている内容ばかりでした。久慈の地域が三つの川によって津波の影響を免れたこと、地区によっては防波堤がよく機能していたことなどを改めて気付いているようでした。

本講演をきっかけにして、地元地域の災害対策を知らないことを知り、調べてみたいという感想もあり、次につながる講演会であったと感じております。特に津波の専門的知識を学べてよかったという感想が多く、今後の避難行動の際、正しい行動ができるものと期待できる受け止め方を生徒がしているのが何よりだったと思います。

<写真>



【事例⑦】「花巻市立湯本中学校」への講師派遣

日時：平成27年1月22日（木）13時30分～15時20分

場所：湯本中学校

対象：湯本中学校 第1学年 54名

講師：岩手医科大学 災害医学講座 眞瀬 智彦 特命教授、藤原 弘之 特命助教

演題：『東日本大震災津波の様子と被害の状況について』

<講演要旨>

(1) 災害医療について（眞瀬 智彦特命教授）

- ・救急医療と災害医療の違い
- ・トリアージ、がれきの下の医療、広域医療搬送、DMATの説明、トリアージ演習
- ・東日本大震災時の県内の病院の状況

(2) 災害時の情報伝達について（藤原 弘之特命助教）

- ・災害時にはトランシーバーや衛星電話を使用、トランシーバーを使った伝達演習
- 衛星電話による伝達演習

<生徒からの感想（抜粋）>

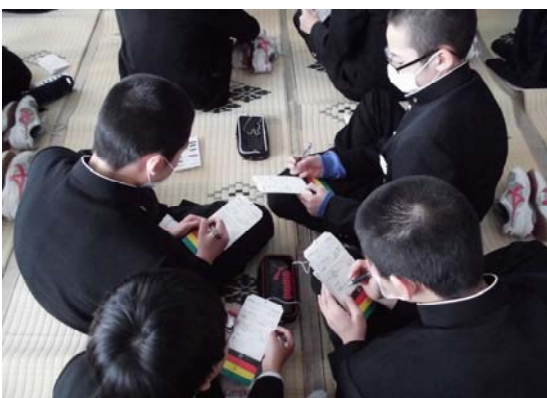
・知らなかった災害医療について知ることが出来ました。災害現場で多く活躍しているのが「DMAT（災害派遣チーム）」です。実際に東日本大震災の時に全国から385チームが被災地に派遣され、医療活動にあたりました。私は、震災時にDMATが医療活動にあっていたのは知っていましたが、385のチームが来ていたことにびっくりしました。もう一つ災害医療で大きな役目を果たしているのが「トリアージ」です。4つの色で重症度・緊急度に分け、治療の順番を決めます。実際にやってみて症状を見て色を決めるのはもちろん、書くのも大変でした。これを一人の患者に30秒くらいでやるのはすごいと思いました。眞瀬先生のお話の中にあつたように「一人でも多くの人を助きたい」この一心で多くの方が医療活動にあっているのだと思いました。

・藤原先生からは、災害時の情報伝達についてお話を伺いました。普段いつも使っている電話や携帯は実際の災害の時はほとんど使えませんでした。だから災害時に救助活動や医療活動にあたる人は、人工衛星を利用した衛星電話やトランシーバーなどを使います。時代が進み、災害時でももっと簡単に情報が伝えられるようになったら救える命が少しでも増えるのではないかと思います。

<講演による効果>

- ・災害医療についての知識や理解が深まったことが生徒の感想からもうかがえる。
- ・「トリアージ」の演習やトランシーバーや衛星電話を使った演習が出来たことで、講演内容が理解しやすく、今後の生活について考える時間となった。
- ・中学生でも理解できるプレゼンや、「トリアージ」「DMAT」など難しい言葉について易しく解説をしていただき、災害が起こったとき一つでも多くの命が助かるようなことをもっと知りたいと感想を持つ生徒がいた。

<写真>



【事例⑧】「盛岡市立玉山中学校」への講師派遣

日時：平成27年1月26日(月) 13時30分～14時20分
場所：玉山中学校 視聴覚室
対象：玉山中学校 第1～3学年(全校) 27名、教職員8名
講師：岩手県立大学 総合政策学部 伊藤 英之 教授

<講演要旨>

前半は、防災対応カードゲーム教材「クロスロード」を利用し、グループ毎(5人×7グループ)にカードに書かれた事例についてYESかNOか自分の考えを示し、メンバー同士で意見交換を行った。

後半は、伊藤先生による講義を通して、災害対応においては必ずしも「正解」があるとは限らないことや、万が一の場合には、誰もが自分の意見をしっかりと持ち対応すること、そのために災害が起こる前から考えておくことの大切さなどを学ぶことができた。

<生徒からの感想(抜粋)>

- ・突然万が一の場合があった時、「答えがない」と言うことが分かった。どちらを選ぶにしても、決断をしなくてはならないということが分かった。それぞれ違う意見があって、もし自分が災害に巻き込まれても、冷静に判断していきたいと思った。(1年女子)
- ・災害時には生き残った者が勝ちという事が、なるほどなと思った。また、非常時の行動の答えはなくて、どれも正解だという事が分かった。もし、非常時には、僕も適切な判断をして、自分の命や他の人の命を救えるような判断ができるようになりたいと思った。(2年男子)
- ・今日のカードゲームをやっていて、全ての質問に悩んだ。どの答えにも問題点があることも分かった。私たちのグループでは、「命は一つしかないから」ということが共通点だった。伊藤先生が最後におっしゃっていた通り、情報をいち早く得て、それを共有することが大切なのだと思う。(3年女子)
- ・伊藤先生のお話の中で、「この問題に正解はない。生き残った人が勝ちなんだ」という言葉があった。僕はこれを聞いて、まず考えるべきなのだと思う。また、「情報は互いに伝えるべき」という言葉もあり、自分が生きるために行動しながら、皆と協力して助け合っていくことが大切なのだと学んだ。僕の「その時」のために備えていきたい。(3年男子)

<講演による効果>

今回の学習を通して、生徒・教職員共に災害対応を真剣に自分自身の問題と捉え、様々な考えや価値観を共有することができた。また、過去の事例が必ずしも正解とはいえない場合もあることや、実際の災害時には想定外のたくさん問題に直面することを実感し、具体的に災害のイメージ化を図ることもできた。日頃から想像力を高め、意思決定することの大切さを学んだことは、生徒にとって確かな「生きる力」となり、今後の人生がより豊かなものになるものと思っている。最後に伊藤先生、補助に入って下さった学生4名に深く感謝したい。ありがとうございました。

<写真>



【事例⑨】「岩手県立黒沢尻工業高等学校」への講師派遣

日時：平成27年2月4日（水）13時35分～15時25分
場所：黒沢尻工業高等学校
対象：黒沢尻工業高等学校 第1学年 228名、教員 12名
講師：岩手医科大学 災害医学講座 特命教授 眞瀬 智彦
演題：『災害時の医療活動について』

<講演要旨>

- ・災害医療の概要
- ・トリアージ、瓦礫の下の医療活動、広域搬送、DMATの活動等
- ・ワークショップ

<生徒からの感想（抜粋）>

- ・トリアージによる治療の優先順位について演習をとおして興味を持って楽しく学ぶことができた。
- ・クラッシュ症候群の防止に阪神淡路大震災の教訓が見事に活かされたことに感動した。
- ・沿岸部の各病院が被災しながらも医療活動がしっかりと続けられていたことに驚かされた。

<講演による効果>

巨大地震、大津波、それらが誘発した原発事故など、どれもが我々教師の想像を超える大災害でした。学校としても危機管理マニュアルに基づいた行動が取れることや、場面に応じて適切かつ臨機応変な行動が取れることなど、危険回避の強化に努める必要があることを強く感じました。今後、生徒の健康と安全を保障するために想定外をつくらぬような防災教育を実践していきたいと考えます。

<写真>



【事例⑩】「岩手県立盛岡第三高等学校」への講師派遣

日時：平成27年2月26日（木）15時05分～16時05分

場所：盛岡第三高等学校

対象：盛岡第三高等学校 第1学年 283名

【講演内容①～③ 希望選択制】

講師①：岩手県立大学 宮古短期大学部 教授 植田眞弘

演題①：「沿岸被災地の地域経済を復興から持続的発展の軌道にのせるための課題」

<講演要旨>

沿岸の地域経済の震災前と震災後の変化、拡大する内陸との経済格差の現状、地場産業の現状、地域産業が競争をつけるための課題と可能性



講師②：岩手県立大学 社会福祉学部 准教授 細越久美子

演題②：「外国人の防災」

<講演要旨>

震災時体験、在日外国人の地位や岩手県在住の外国人の状況、震災時の外国人への支援の状況、普段から外国人とコミュニケーションを取ることの重要性、わかりやすい日本語での情報提供の必要性



講師③：岩手医科大学 こころのケアセンター 副センター長 大塚耕太郎

演題③：「こころの健康について～こころに寄り添うために～」

<講演要旨>

流れ星エクササイズ（演習）、人とのコミュニケーションの取り方、良いコミュニケーションを取るための「ON」「OFF」の関係とその関係作りのためのスキル、相手の感情を捉えることの大切さ



<生徒からの感想（抜粋）>

- ・大震災の被害から復興には大変革が必要だと思った。僕もしっかり考えて将来は変革を担える人材になりたい。また、絵に描いた餅ではなく具体的に論理的に数字を使って考える未来を創る経済学が楽しいと思った。
- ・今回の講座に参加して日本で外国人の生活を支援するということは興味深いと思いました。今回の講座は、自分の将来を考えるよいきっかけとなりました。また、外国語の勉強をしっかり積み上げたいと思いました。

<講演による効果>

事後のアンケートの結果、「自分の成長や向上のために有意義な取り組みだった」の項目に「そうである」「どちらかというところである」という前向きな評価が9割以上をはじめとして、その他の項目に対しても7割以上の前向きな評価がなされた。このような取り組みは一般教科の学習への意欲や進路意識を喚起する意味でも大きな効果があることを発見できた。

【事例①】「一関市立巖美小学校」への講師派遣

日時：平成27年3月4日（水）10時45分～11時30分

場所：巖美小学校

対象：巖美小学校 第4～6学年 93名、教員 6名

講師：岩手医科大学 災害医学講座 眞瀬 智彦 特命教授、藤原 弘之 特命助教

講演：『災害医療について』

演習：『情報機器の活用』

<講演次第>

- 1 開会のことば
- 2 校長挨拶及び講師紹介
- 3 講演「災害医療について」
- 4 演習「情報機器の活用」
- 5 閉会のことば

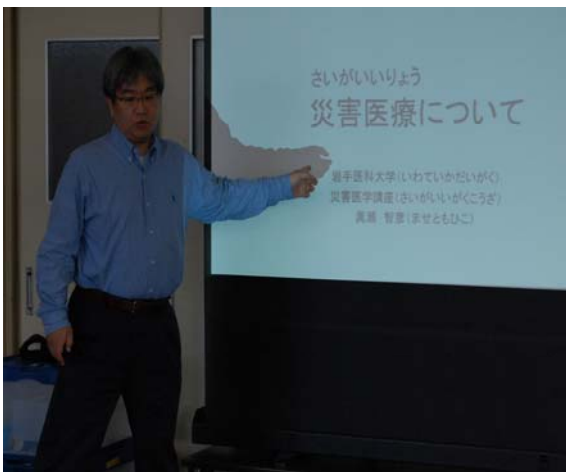
<生徒からの感想（抜粋）>

- ・災害があったら、まず自分の命を守り、そして他の人を助けることが大切だと感じました。自助、共助、公助を覚えていきたいです。（4年生）
- ・震災のとき、電話がないとひどいなと思いました。今日は電話が使えないときはトランシーバーや衛星電話で連絡できることを学びました。連絡を取りたいときにどうしたらよいか分かりました。（5年生）
- ・うちに帰ってこれから起こるかもしれない災害について話し合い、家族の中でどうしたらよいかを相談しておきたいです。（5年生）
- ・今日の学習で、災害があったとき、たくさんの患者さんがきて、呼吸や脈をみて検査するのは大変だと思いました。けがの状況で色が分けられていることを知りました。どんな人を優先しなければならないかということも分かりました。（6年生）

<講演を終えて>

今日教えていただいたことを家族と話題にしながら、頂いた備蓄食を食べることを宿題にしました。

<写真>



【事例⑫】「一関市立涌津小学校」への講師派遣

日時：平成27年3月16日（月）10時35分～12時00分

場所：涌津小学校

対象：涌津小学校 第5～6学年 51名

講師：岩手医科大学 災害医学講座 眞瀬 智彦 特命教授、藤原 弘之 特命助教 他3名

講義①：『災害時の医療』（トリアージについて）

講義②：『災害時の通信』

実習①：『災害時の通信』（トランシーバー、衛星電話の操作）

<講演による効果>

児童は興味をもって参加した。時に自助・協助・公助について知り、災害時に自分にできることは何かという視点で学習を深めていた。また、災害時医療の取り組みを知り、頼もしく感じるとともに、その仕事に憧れをもつ子も出てきた。

<写真>

